

# 戦後那覇の都市復興と街路名の生成

加藤 政 洋

一人の歩行者として那覇の街を歩いていると、  
ふと旅行者になった気分に含まれる時がある。<sup>1)</sup>

## I はじめに

### (1) 研究の目的

戦後、米軍の統治下におかれた沖縄では、日本本土における都市復興とは異なり、米軍の土地占有と基地関連施設の建設による影響が全面に及ぶ特異な状況を呈していた。日本の行政から切り離され、首都として位置づけられた那覇では、戦前の旧市街地から離れた農村部に新しい市街地が形成され、しかも商業に特化するかたちで急激な都市化が進行する。その結果、戦後の日本にあっては類を見ない都市形態が出来し、その空間構造は現在にいたるまで都市の骨格を枠づけていると言ってよい。

注目されるのは、この急激な都市化の過程で形成された街路・街区に対し、次から次へと新しい名称が付与されて人口に膾炙し、その多くが現在まで残る地名（通称をふくむ）として定着したことである。例を挙げるならば、那覇市の目抜き通りとして知られる「国際通り」は、市街地化の最初期に立地した映画館「アーニーパイル国際劇場」の名にちなむものであるし（現在は正式な名称）、あるいは開業医の病院が集積する街路は（正式な名称でないものの）ひろく市民の間で「病院通り」と呼ばれるなど、戦後に発生した地名は枚挙にいとまがない。

大正8（1919）年測図の地形図以降、50年以上のブランクをおいて本土復帰後の昭和49（1974）年に発行された那覇市の市域をふくむ地形図（2万5千分の1）には、当時はまだ通称であった街区名（かんざとぼる神里原）も採録されるなど、新しい地名の分布にはじつに興味ぶかい布置構成をみてとることができる。逆に言えば、戦後に登場した数々の地名は、都市形成の歴史地理を象る記号の星座であるとも言えるかもしれない。

以上の点をふまえつつ、本稿では、戦後那覇の市街地形成とともに発生した街路名を概観し、それらを都市化の歴史地理に定位することで、地名の生成原理の一端を解き明かしてみたい。

本論に入る前に、研究の手続きについて簡単にふれておく。1974年の本土復帰後初となる地形図（2万5千分の1）をベースにして、まず戦後の都市化の過程で形成された市街地の範囲を把握した上で、旧来の町名や字名に由来する住居表示上の町名を除いた地名／街路名を『一九五九年版 見取図付沖縄案内「此の一冊あれば」（大那覇市の巻）』<sup>2)</sup>から抜き出す（本章次節）。次いで、戦後那覇の市街地形成を概観し、都市形態の特色を明らかにしたうえで（Ⅱ）、商業集積の様態と街路名の生成について検討をくわえる（Ⅲ）。最後に生成の契機を整理することで、まとめに替えたい（Ⅳ）。

## (2) 那覇市における 1950 年代後半の地名

『一九五九年版 見取図付沖繩案内「此の一冊あれば」(大那覇市の巻)』は、住宅地図に先立つ商工案内図とでもいふべき地図 64 枚をふくんでおり、戦後那覇の都市地理ないし商業地理を考えるうえで貴重な資料のひとつである。同書の「あとがき」によると、1951 年に初版を発行して以来、改訂を重ねること 5 回目の再版であるという。1950 年以降、急速に市街地化が進行したことを考えると、同書に収録された地図は都市化と地名の生成を考察する出発点となるだろう。

『一九五九年版 見取図付沖繩案内「此の一冊あれば」(大那覇市の巻)』の収録地図に記載された地名(主として街路名)をページごとに第 1 表にまとめた<sup>3)</sup>。一見して明らかとなるのは、字名や町名など、旧来の地名に由来する名称——「安里大通、三原大通、若狭大通、上之蔵通り」など——がある一方で、施設名に由来する街路名が多数存在することである。直截的な表記としては、「政府前通り、教育会館通り、病院通、消防隊通り、刑務所通り」などがあるし、「沖映通」や「グランドオリオン通り」はどちらも映画館にちなんだ街路名だ。

なかには、「日野通」や「旭通」など、地図と名称からだけでは由来の不明な街路もふくまれるが、地図上の表記から判断するかぎり、戦後那覇における地名(街路名)の生成は、二つに大別できるだろうか。すなわち、旧来の地名か、あるいは戦後新たに登場した施設名のどちらかに由来するということだ。

第 1 表 『見取図付沖繩案内』に記載された街路名

1 政府前通り 国際本通 教育会館通り	33 安里大通 沖劇通
2 久茂地川筋 一銀通り 美栄橋病院センター通り 教育会館通り	34 大道校通(一) 沖劇通(二) 栄町中央通 栄町ロータリー通(二)
3 国際本通一 教育会館通	35 安里大通一 松川大通 三原大通(一) 松川校通
4 国際本通二 国際中央通一 松尾消防隊通 一銀通 浮島通り 新生通り一 新生通	36 安里橋通 真和志消防隊通(一) 日野通 真和志郵便局通
5 国際中央通(二) 新生通一 浮島通 新生通二	37 真和志郵便局通(一)
6 国際中央通 市場中央通一 栄橋通	38 三原大通 大原通 真和志消防隊通(二)
7 新生通三 沖映通 沖映川向通(二) 十貫寺通 牧志新中通 病院通	39 真和志消防隊通(二) 真和志校通 寄宮中校通 識名大通
8 国際中央通 国際大通一 沖映通一 病院通	40 寄宮中校通 真和志消防隊通 ガラス工場通り(一)
9 国際大通一 中央市場通 沖映通 平和通裏通 病院通 平和通 牧志中通(一) 桜坂中通 牧志新中通	41 与儀材木店通(一) ヨギ市場通
10 国際大通(二) グランドオリオン通一 オリオン横筋 桜坂中通一 桜坂通	42 与儀材木店通(二)
11 国際大通(三) 牧志新中通 グランドオリオン通り オリオン横筋 オリオン裏筋	43 壺川通り
12 国際大通四	44 旭町大通(一) 壺川大通(二)
13 国際通 牧志新中通(一) 牧志中通(二) Gオリオン通	45 政府南大通り二、旭町大通(二) 松尾中通 松尾消防隊通
14 国際大通 平和通二 平和通裏通 栄橋通	46 刑務所通り 政府南大通り(二) 開南本通 カトリック教会通
15 平和通二 栄橋通 えびす通り 桜坂通一 桜坂中通 新栄通	47 蔡温橋通(一) 安里三叉路 崇元寺通り(一) いすず通

16	桜坂中通二 桜坂通 (二) グランドオリオン通二	48	崇元寺大通 (二)
17	壺屋通り 壺屋坂通 旭通 新栄通 神里原通	49	崇元寺通 (三)
18	国際中央通 浮島通 千歳通 (一) 中央通	50	崇元寺通四
19	千歳通 (二) 栄橋通 (二) 新生通 新成通 市場中央通	51	一号線 前島大通 泊棧橋通
20	千歳通 (三) 神里原通 新栄通 (三) えびす通り 中央市場通 新成通	52	一号線路 (二) 前島大通
21	神里原通一 千歳通 旭通 新栄通 (二) 平和橋通 農連市場通り	53	一号線路 (三)
22	神里原通二 平和橋通 神里原裏通二	54	若松卸街本通り 若松卸街東通 若松卸街西通り
23	神里原通三 真和志局通り 幸楽通 農連市場通二	55	〔若狭町一帯、街路名無し〕
24	消防隊通り 浮島通り 開南本通 那覇高校前通り	56	波の上通 上の蔵通り 若狭大通
25	開南本通 消防隊通 刑務所通 中央通り 新栄通	57	〔辻町一帯、街路名無し〕
26	新栄通一 中央通 農連市場通り 千歳通	58	〔西新町・東町一帯、街路名無し〕
27	開南通一 農連市場通り (二)	59	一号線 天久大通
28	開南通 (二)	60	安謝大通
29	幸楽通り 姫百合橋通り 神里原通 真和志郵便局通 壺屋通 (二) 日野通り 安里橋通 真和志消防隊通	61	池端大通 観音堂筋
30	姫百合橋通り (一) 日野通	62	当蔵大通二
31	姫百合橋通 (二)	63	〔ペリー・小禄一帯、街路名無し〕
32	姫百合橋通り (三) 安里大通 (一) 八幡筋沖劇通	64	高良市場通 新辻町料亭街

\* 『見取図付沖縄案内』より筆者作成。

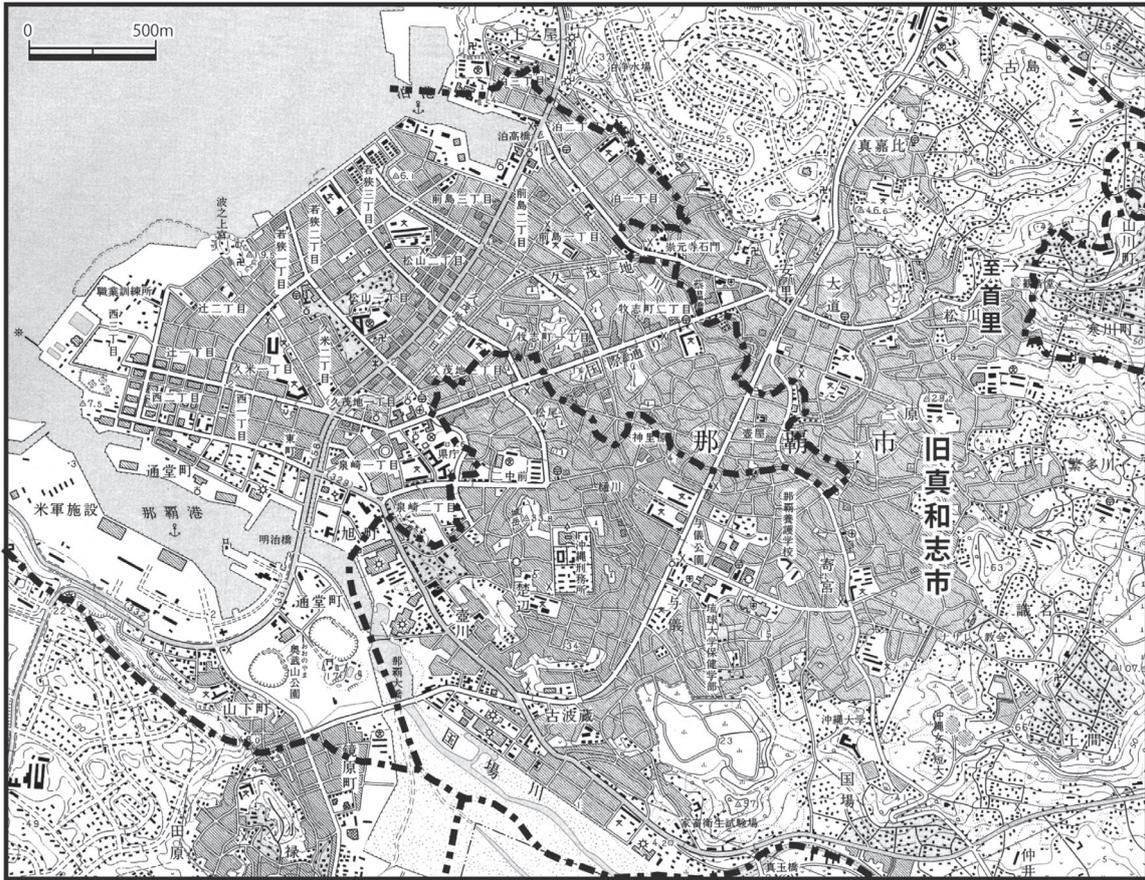
## II 戦後那覇の市街地形成

### (1) 市街地の対照性

沖縄島の南部に位置する那覇市は、1949年10月10日の空襲とその後の激しい地上戦を経て、戦後、米軍占領下琉球の首都として、総合的な領有状態から部分的かつ段階的な土地開放の進捗にあわせて、急激な市街地化を経験した都市である。米軍の統治という特異な条件のもと、戦前を上回る人口の移入とともに形成された市街地には、なかば自然発生的に市場ができ、部分的な計画をともなう開発によって劇場（映画館）を核とした飲食関連サービス業の集積する歓楽街が随所に誕生した<sup>4)</sup>。こうして戦後の那覇は、住宅地と商業地とが空間的モザイクをなす一大消費都市となったのである。

第1図を参照してみよう。下図は1920年、上図は1974年発行の25,000分の1地形図をそれぞれ基図にしており、戦前・戦後の市街地の拡がりを比較することができる。両図ともに旧行政界を破線で示し、1920年発行の地形図には、戦後に那覇の目抜き通りとなる国際通りの位置を太線で示した。

この上下二枚の図から明らかとなり、戦後の那覇は戦前をはるかに上回る市街地の拡がりを有



第1図 那覇における市街地のひろがり（戦前・戦後の比較）  
 2万5千分の1地形図（上：1920年／下：1974年）を基図にして筆者作成。

している。しかも中心的な商業地区は、臨海部に位置した旧の市街地を遠く離れ、旧真和志村（市）の低地部をふくむ、かつての近郊農村へと空間的に移動していた。国際通りの位置性は、このことを如実に物語っている。

第2図は、1974年発行の25,000分の1地形図から地図記号の「道路」をすべて抽出したものである。おおよそ久茂地川を挟んだ西側（旧市街地側）は、開放のタイミングが遅れたために、区画整理事業の実施が可能となり、整然とした街区が誕生した一方、久茂地川の東側は国際通りを越えて首里のふもとへ達するほどに、スプロールした街区が分厚く展開している様子を見とることができる。戦後那覇の市街地形成に多大な影響を及ぼしたのは、米軍による土地開放のタイミングなのであった。いち早く開放された近郊に対し、旧市街地側が遅れたことによって、あまりに対照的な空間が生産されたのである。

次の新聞記事は、戦後初期における市街地形成一般の傾向を示していると言えよう。

「島消えて『街』に変わる」 人足まれな田んぼや畠にどつと家を建て、ひしめき合った戦後の那覇市街が神里原にふくれて真和志村と軒を連ね、更に真和志野の大原、三原、大道、松川に続いて、目と鼻の間にある首里市寒川区の下に新しい屋根が一つ、二つ、三つ、あと数百米首里市金城町の住宅地につながってしまう。（『沖縄タイムス』1952年5月21日）



第2図 戦後那覇における街路網

2万5千分の1地形図（1974年）を基図にして筆者作成。

このようなスプロール地区の空間形態が、後に作家の島尾敏雄をして那覇を「ラビリンス」と言わしめることになるのだった<sup>5)</sup>。

他方、土地の開放が遅れた久茂地川右岸においては、「土地区画整理事業は都市計画の母」という語りを地でゆくがごとく、区画整理事業が全面的に施行され、あわせて用途規制も敷かれたことから、現在につらなる実に対照的な市街地景観が誕生した。これもまた、米軍の占領・統治下における都市空間形成の帰結のひとつと言えるだろう。

## (2) 「一銀通り」の開通

新旧市街地の対照性について、ここでは街路名の生成とも関わる事例をひとつ挙げておきたい。

1958年3月5日、那覇市の中心部を貫通する一本の幹線道路が開通した。国際通りから久茂地小学校の北を抜け、久茂地川をわたり、そして旧軍道1号線（現・国道58号）を横切って卸問屋街の若松通りへと至るルートである。1953年の都市計画法を那覇市に適用した際に設定された全長2,167<sup>メートル</sup>の街路で、幅員は当時としては高規格の13メートルであった。この街路の開通を報じる記事を、少し長くなるが引用しておきたい。

「新旧市街を結ぶ 那覇の『一銀通り』」

那覇市国際中央通りと旧市街の若松通りを結ぶ都市計画幹線道路『一銀通り』（国際中央通り第一相互銀行横から久茂地橋、一号線を経て若松へ）は、去る五日開通した。

戦後那覇市への異動は、楚辺、壺川、松尾一帯のいわゆる旧港村から、牧志、壺屋一帯に限られたために、商店街は牧志を中心に発展して、旧市街地は置き去りになり〔、〕開放になっても、これを結ぶ道路が安里から泊を経ていくのと、政府前から久茂地を経ていく（大回り）の二本しかないために、旧市街地の復興は立ちおくれていた。

それで新旧両市街を結ぶ道路の新設はかなり前から市民の要望となっていたが、この道路の完成で両市街の距離は、ぐっとちぢまっただけでなく、あふれる国際通りの交通量も緩和される。

今では、若松通りの問屋から市中の各商店への商品を運ぶトラックや、タクシーがひっきりなしに通っており、市都計課ではさらに区画整理がすんでいながら、移動のおくっている旧市街への移動が促進され、牧志一帯のごみごみした密集地の緩和にも役立つだろうと語っている。（『沖縄タイムス』1958年3月10日）

この記事によると、戦後の那覇市への人口移動は、当初、壺屋や牧志の一帯に限られていた。そのため、那覇四町（東・西・若狭・泉崎）と称された旧市街地を「置き去り」にするかたちで、牧志を中心に商業地が発展する。ところが、旧市街地が開放された後も、安里から泊を経由するか、あるいは政府前から久茂地を経て行くほかはなく、いずれも大回りをしなければならなかったため、旧市街地の復興はなかなか進まずにいた。そこで、新旧の市街地を結ぶ必要性から、貫通する道路が開発されたというわけだ。

新道路の開通にあわせて名称を公募したところ、久茂地と若松からそれぞれ一字ずつをとった「久松通り」や「久茂地橋通り」などの地名にちなむもの、あるいは「ときわ通り」や「あけぼの通り」のように慶賀する名も候補にのぼっていた。実際、戦後に形成された新市街地には、橋に由来する街路名も多数存在していたものの、このとき選ばれたのは、起点となる国際通りに立地していた第

一相互銀行にちなむ、その名も「一銀通り」にほかならない。

記事中にある「若松通り」は、約 60 軒の卸売店（当時は商社と呼ばれた）が建ち並ぶ、計画的に開発された問屋街であった（1956 年 11 月 4 日開業）。新市街地における「商店街」の発展、すなわち旧市街地を「置き去り」にするかたちで市場・商店街を核とした商業地区が形成されていたものの、遅れて開放され、なおかつ区画整理された街区に卸商という都市機能が充填されたことで、新旧の市街地を結ぶ街路の開通が待望されたのだ。

実際、「一銀通り」の開通によって「……両市街の距離は、ぐっとちぢまった……」とされるように、効率的な流通・交通を担保する建造環境を生産することで、新旧市街地の時間距離は確実に短縮されたのである。これを受けて、若松通りの問屋から各商店への配送の効率化、国際通りの交通量緩和、さらには旧市街地への人口移動とそれにとまなう新市街地の「ごみごみした密集地」の解消までもが期待された。そして、一銀通りそれ自体もまた、そう遠くない未来に商店街になると予測されたのである。

空間的想像力にもとづく未来予想図が言葉どおりに実現することはなかったけれども、都市の空間構造（中心-周縁関係）をひっくり返したような戦後那覇を物語るひとつのエピソードと言えよう。

以上のような都市化の地理歴史的コンテクストをふまえ、Ⅲでは新市街地たるスプロール地区に焦点をしぼり、街路名の生成について考えてみたい。

### Ⅲ 商業集積と街路名の生成

#### (1) 「上町小」から「公設市場」へ

戦後那覇における中心市街地の形成は、旧真和志村域をふくむ、開南・神里原・壺屋・牧志にはじまる。なかでも特筆すべきは、1947 年に一部の土地が開放されたため、後に「上町小」と称される<sup>うえまちぐわー</sup>ところとなる闇市場が、開南の高台に「自然発生」したことであろう。近郊農村の野菜、糸満の魚介類、そして米軍基地の「戦果」、さらには与那国や奄美諸島を經由して沖縄島内に持ち込まれた闇物資など、戦後のごく限られた流通の結節点として、統治空間の隙間を縫うように「上町小」が登場した。

しかしながら、衛生上の問題、そして何よりも「闇」の物資が取り引きされていたことから、軍政府の指導が入り、那覇市や警察の方針とも絡んで、市場は戦前には見向きもされなかったガープ川の低地へと移動を強いられた。ガープ川左岸の土地区画に縄を張って区割りし、テント小屋（バラック）が設営されたという。これは、地主が疎開している不在時に、行政が土地を割り当てることで実現した。こうして 1948 年 4 月、事実上の公設市場として、現在にまでつらなる市場の歴史が幕を開けたのである。

その後、1950 年に食料品市場、翌 1951 年にはガープ川を挟んだ東側に雑貨・衣料の市場が「セメント瓦」葺で建設される。『沖縄商工名鑑 1956 年版』の「市場マーケット」によると、「那覇市公設市場」では、雑貨（204）、衣料（241）、食糧（40）、米穀（64）、鮮魚（25）、精肉（107）、鰹節（18）、野菜（20）の計 719 名が 27 棟の建物（計 670 坪）で営業していた。「業況」として、「創立六年を迎え〔、〕市民及全住民の生活必需品を提供し、其存在は市民生活に浸透し、常時一万人の業者と其利用者に依つて活況を呈し、一面琉球の名物ともなっている」と説明されていることから、移転後の市

場は、地元はもとより、島全体の住民を消費者とするほどに発展していたことがわかる<sup>6)</sup>。

注目されるのは、この「上町小」から牧志への市場の移転・新築をきっかけに、ガープ川周辺の低地部で急速に商業集積が進んだことである。旧来の道路には次々と商店が建ち並び、瞬く間に商店街を形成したのだった。

## (2) 1950年代前半の商業集積と商店街の成立

第2表は、『沖縄商工名鑑』における1951年版「商店街案内」ならびに1953年版「那覇商店街案内」から<sup>7)</sup>、すべての商店街を一覧化したものである。両年を比較すると、1953年には数も増えて、商業地が拡散している様子を見とることができる。なかには名称の変更や空間的な分化もふくまれるので、地理的な文脈に配慮しつつ個別に検討しておこう。

### 「神里原商店街」

昭和8(1933)年に牧志街道として開発された国際通りをはじめ、樋川大通り(二中前～開南)・開南大通り・崇元寺大通り・壺屋通り・姫百合橋通り(現・ひめゆり通り)など<sup>8)</sup>、旧市街地の外郭に位置する道路に沿って、各種商店の集積していることがわかる。そのなかにあって、ひとり「商店街」を冠されているのが「神里原商店街」であった<sup>9)</sup>。神里原については、別のところで詳細に論じたように<sup>10)</sup>、戦後の那覇で計画的に開発された最初の商店街であり、国際通りが目抜き通りに成長する間の中心地であったことから、あえて「商店街」と表記されたのだろう。

### 「市役所前通り」と桜坂

ここで、ひとつ注意を要するのが「市役所前通り」であろうか。当時の市役所は、牧志3丁目の希望ヶ丘公園東側に位置していた。市役所の跡地に映画館のグランドオリオンが立地したことから、

第2表 1950年代初期の商店街と店舗数

1951年		1953年	
国際通り	93	国際通り会	93
市役所前通り	30	桜坂通り会	51
市場通り	23	平和通り	81
市場本通り	29	西市場中央通り	20
市場中通り	14	市場中央通り	13
新栄橋通り	59	銀座通り団	18
世界館通り	18	新生通り会	36
千歳大通り	56	世界館通り	18
栄橋通り	18	栄橋通り会	36
樋川大通り	26	エビス通り会	23
開南大通り	10	沖映通り	44
崇元寺大通り	29	中央市場通り会	20
神里原商店街	94	千歳橋通り会	60
		壺屋通り	21
		樋川通り会	66
		神里原通り	36
		姫百合橋通り	35

\* 『沖縄商工名鑑』  
各年版より筆者作成。



位置関係を比定することは難しい。

たとえば、現在「平和通り」として知られる商店街は、もとは「市場通り」と呼ばれていた。また、1951年の「市場本通り」に記載された店舗が、1953年の「平和通り」にふくまれていることから、おそらく栄橋を境にして、国際通り側が「市場通り」、壺屋側が「市場本通り」だったものと思われる。「戦前すててかえりみられなかつたガープ川流域の低湿地一帯に自然発生的に出来た那覇市最大の繁華街市場通り」（『うるま新報』1951年8月4日）というように、「那覇市最大の繁華街」、それが1950年代初頭の「市場通り」だったのである。この描写では「自然発生的」に形成されたとあるが、実際には住民たちの積極的な取り組みがあったようだ（『琉球新報』1955年12月1日夕刊）。

すなわち、1947年末から1948年にかけて、佐久川長吉（1954年立法院議員総選挙で当選）らが音頭を取り、集客（「人寄せ」）を目的とする魚市場を開設した。さらに、具志幸得、国吉良健、友寄隆賀、国吉大昌、森田孟真、比嘉良雄らが協議の上、波の上から砂や石を運んで、「付近にあつた一トン爆弾痕の穴」や「沼沢地」を埋め立てて整地した。そこに、「上町小」の市場商人たちが大挙して移動してきたため、「この通りの発展を目指して、誰いともなくつけられた名称が『市場通り』」だったのである（『琉球新報』1955年12月1日夕刊）。

1948年、通り会の初代会長に発起人のひとりであった友寄隆賀が就任し、那覇市が本腰を入れて道路の改良工事に着手する。翌1949年には国吉良雄が会長となり、通り会をブロック別に組織化する那覇商業組合を結成した。1950年には森田孟真（1955年10月第4回那覇市議会議員再選挙で当選）が会長となり、「防犯と商業発展」を目的に街灯を設置、1951年には佐久田猛雄が会長となって、那覇市からアスファルト資材の供給を受け、通り会が受益負担金60万円を拠出して道路の舗装工事が実施された。1952年には森田孟真が再登板し、第一回商工祭を前に「平和通り」への改称を決定したのである（『琉球新報』1955年12月1日夕刊）。爾来、この名は那覇を代表する商店街名＝街路名として人口に膾炙し、旧称は忘却された。

### 「千歳橋通り」から「浮島通り」へ

次いで、「千歳大通り／千歳橋通り会」についてみよう。第3図からも明らかなおおり、この商店街名＝街路名は、現・浮島通りとガープ川の交点にあった「千歳橋」に由来する。また1950年代を通じて、現在の名称として定着している「浮島通り」も併用されていた。後者の名は、この通りに立地していたホテルから来たものである。その浮島ホテルの開業は、「清楚な座敷で気安くやすめるホテル 浮島 那覇市市場南通り」という新聞広告にもあるとおり（『うるま新報』1948年12月10日）、いまだ千歳橋通りという名称すら存在しない、1948年10月のことであった（『うるま新報』1948年10月28日）。

千歳橋通りといえばひとところ浮島通りまたはトマチ（鶏市）で名の売れたところ。街にはまだ天幕小屋がゴテゴテと並んでいたころ泥沼地帯をひらいて戦後、那覇で最初のホテル浮島が建ち、鶏やアヒル、犬、猫の家畜市場が生れた。従つて通りの発展も西は浮島から、東はトイマチから次第にのび今日のゆるがぬ繁栄を築いている。（『琉球新報』1955年12月10日夕刊）

旧道であった千歳橋通りには、企業活動の自由化した1949年を境にして、浮島ホテルの立地した国際通り側、そして千歳橋周辺で商店や事業所の集積が進んだ。結果的に、橋の名にちなむ街路名

が定着したようだ。

「千歳の名は浮島通りの異名とともにその名は古い……」とされているとおり、少なくとも1950年代は「千歳橋通り」が主たる通称となっていたが、その後、浮島通りの名に押されて、またガーブ川の暗渠化にともなう橋の消滅によって、最終的には浮島通りが定着したものと考えられる。1959年版の『沖縄商工案内』における「那覇地区商工案内」では「千歳橋通り」と表記されるものの、1972年3月17日発行の「那覇市全図」(1,2000分の1、人文社)になると、浮島ホテルの立地とともに、街路名としても「浮島通り」が示されていることから、復帰当時、すでに「千歳橋通り」は消滅していたことになる。

### 公設市場周辺の商店街

1951年ならびに1953年の商店街案内には、既出の分を除けば、市場中通り・西市場中央通り・市場中央通り・中央市場通りと、似て非なる商店街名がならんでいる。これらの位置関係を比定することは難しいのだが、「その名は市場中通り」と題された次の記事を参照してみよう(『琉球新報』1955年12月14日夕刊)。

牧志通りと呼ばれる那覇市のメイン・ストリートにかかるガーブ川の`むつみ、橋の、橋ぎわを折れて平和通りとへい行して並ぶその通りが`市場なか通り、である。`通り、は栄橋で中央市場通りにつながる。平和通りを表とすればここは裏であり、その通りには裏町の庶民の哀歓がそこはかたなく流れる。

この描写から明らかとなるのは、現在の「市場本通り」が市場中通り、同じく「市場中央通り」が中央市場通りだったことである<sup>11)</sup>。1953年の商店街案内からは市場中通りが落ちているが、店舗名から推察するに、(当時の)市場中央通りが市場中通りに相当するものと思われる<sup>12)</sup>。

ガーブ川に沿って連続する商店街は、市場通り(=平和通り)とほぼ同時期に形成されたようだ。すなわち、「終戦後二年目にか、ガーブ川の川底をさらつた土が川沿いの場所を埋立てると、人が通り、車が往き、それではとバラックが建ち店通りになり、通り会が生れた」という(『琉球新報』1955年12月14日夕刊)。しかしながら、「ガーブ川の川沿いに、川底から危なげな、柱というよりタイで支えられたバラック屋台がズラツと並んでいる。道路をはさんでその向い側も、店、結構一つの`通、である」とも描写されるように、この商店街は後に「水上店舗」として問題化する建造環境であった。当時すでに、那覇市の都市計画で、ガーブ川を暗渠にして現・ひめゆり通りへと抜ける幅12間の道路が開設されることになっており、通り会の会長であった宜保為楷(1953年3月の那覇市議会議員補充選挙で当選)は、「簡単にはいくまい、私の通りだけでも百名、栄橋、那覇劇場の通りで四、五百人の商売人、その家族を合わせて四千五百人ほどの立ち退き者の生活をどう補償するかだ」とのコメントを寄せていた<sup>13)</sup>。

### 栄橋通りと新生通り

市場通り(平和通り)から栄橋へ通ずる道は早くから開かれていたようで、市場中通りを横切り、肉市場の北側を抜けて千歳橋通りへと緩やかな弧を描く道路、それが栄橋通りである(『琉球新報』1955年12月9日夕刊)。この通りは、米軍作成4,800分の1地形図にもはっきりと描かれていること

から、千歳橋通りなどと同様、旧道であると言ってよい。千歳橋通りから肉市場への物資搬入路となっていたため、当初は商業の集積も進んでいなかったが、松尾地区の買い物先として発展したようだ。1953年の商店街案内には、現在も営業をつづける、かまぼこ屋「ジランバヤ」の名前も見られた。

他方、1951年にはなかった商店街のひとつに、新生通りがある。

通り前交番（平和通り）横から栄橋をわたり栄橋通りへ出るとすぐ公設の肉市場前に来る、その肉市場のすぐわきを千歳橋通り（浮島通り）へ抜ける通りが、幅員三間、長さ六十間の「新生通り」である。「新生通り」という名前の示す如く、この通りは商店街としては正に新しく生れた通りである。つまり他の通りに比して最も新しい通りといえるのである。そして新生通りの特徴は、那覇市の台所である公設市場と不離一体の状態にあることで、従つて通り商店の取扱い商品は食糧品一点張りとなつている。公設市場がまだ不完全な建物のころ、この通りは通りなどといわれるようなものでなく、横丁、いや路地といった方がピッタリする抜け道程度のもので雨でも降ると、それこそドロドロのどろんこ道に早変わりする状態にあつた。

この路地が市場を横に控え、開南、神里原、与儀方面から市場へ抜ける近道となつている地の利に目をつけた商人達がぞくぞくここに入り込み、五三年三月には通り会が結成……。『琉球新報』1955年12月13日夕刊)

1953年3月に通り会が結成され、同年中に幅員二間の道路を舗装、1955年11月には一間分を拡幅して、街路・商店街としての体裁を整えていった。旧道を基盤とする周辺の商店街とは異なり、ここは戦後開発型の——まさに「新生」と呼ぶにふさわしい——商店街ということになる。

### 開南と新栄通り

開南における「上町小」の発生をふまえて語られるのが、新栄（橋）通りの歴史である。

那覇市開南交番から壺屋に出る下り坂の通りが、新栄橋通りである。那覇市の新市街がまだ街らしい形をつくらぬ一九四七年ごろ、国場、与儀、古波倉、仲井間<sup>ママ</sup>辺りの農家から野菜ものを持出して売りに出たの〔が〕現在の開南交番付近であつた。通り会ではこれらの物売りや物々交換をする人たちが通行の邪魔にならないように一カ所に集めて商売をさせていたが次第に食料品や食油、豆腐、島産品の下駄、GI服を改造した服などが出るようになり、また日本帰りの人たちの目新しい日本商品や、ビール罐でつくつたブリキ製品も出回るようになったので、場所がせまく、これを中央通りに移したが、現在的那覇市場の発祥の地としてのこの十年の歴史は余り知られていない。『琉球新報』1955年12月11日夕刊)

この記述だけを読むと、「上町小」に先行して、新栄（橋）通りの商店街が形成されていたことになる。事実、通り会の結成は市内で最も古く、1947年1月の時点で「天幕小屋やトタンぶきなど含めた八十戸の店があつた」のだという。「通りが商店街らしい形態を整えた」とされる1947年中に、「通り会の発展」を目的として「自転車をはじめ車馬の通行禁止を申請し〔、〕現在〔1955年12月〕も自転車のほかは通行禁止」であつた。さらに、1948年10月前後に、戦後那覇で最初の「自警団を

組織して〔、〕通り周辺の治安維持につとめ」ていた。1947年の通り会結成以来、9年間にわたり会長を務め、街づくりの先頭に立っていたのが、仲井真元楷（1948年2月第1回那覇市議会議員選挙で当選）である。

1950年代前半は、開南の交番から新栄橋までの店舗は安定的に営業していたものの、新栄橋から丸国マーケット<sup>14)</sup>の位置する千歳橋通り／神里原の十字路に出る方面は、店舗の入れ替わりが激しく、一時的にパチンコ屋が集積したこともあった。また、開南がバス交通網の結節点となったことで、新栄通りの集客力は格段に高まったようだ。

## IV 街路名の生成

### (1) 商業集積と地名

1950年代前半の旧那覇市とその周辺における商業集積は、開南の「上町小」がガープ川沿いの低湿地帯へと移設されたことに端を発している。この公設市場を核として、周辺の旧来の道路には商店が建ち並んでいった。商業集積の過程で、個々の店舗は限られた地理情報を取り合わせることで、既存の施設や街路との位置関係を示し、自らの立地を広告しなければならなかった。店舗の位置を説明する広告には、おのずと無名の街路にわかりやすく名称を付与する実践がともなわれてゆくのである。

さらに列状の商業建造環境の形成は、特定の領域を「商店街」として組織化する気運を確実に盛り上げていった。商店街（商店会——通り会や通り団などとも呼ばれた——）の結成には、地理的かつ社会的な象徴となる名称が必須である。結果として、急激な商業集積は、「にわか仕立て」の名称を冠した商店街名＝街路名を次々と生み出すこととなった。そうであるがゆえに、商店街名＝街路名は単純な地理的素材に由来することが多い。

たとえば、公設市場周辺の商店街名＝街路名の特徴は、すでに見たとおり、「市場」を冠する名称の多さにあった。平和通りの旧称は「市場通り」——それにくわえて、おそらく「市場本通り」——であるし、むつみ橋から公設市場にのびる商店街名＝街路名は、「市場中通り」や「中央市場通り」であった。ちなみに、現在は「市場中通り」が「市場本通り」、「中央市場通り」が「市場中央通り」となっている。

この点について、「市場中央通り」を構成するガープ川中央商店街組合でお話をうかがったところ、看板を設置する際、製作した業者が「中央市場通り」とすべきところを、誤って「市場中央通り」としてしまい、仕方なく組合としてそのままにしたのだという。戦後の困難を乗り越えたからこそその鷹揚な判断であったと言えるだろうか。

いずれにせよ、市場を中心とした消費空間のありようが、街路名にも色濃く反映されているわけだ。

### (2) 橋に由来する地名

旧道を軸線として形成された商店街には、ガープ川の橋に由来する名称が定着したことも、大きな特徴のひとつであった。最初に成立したのは、開南の高台からガープ川の低地へと伸びる旧道が商店街化した「新栄橋通り」である。現在、商店街名は「サンライズなは通り」となっているが、そ

れ以前は「新栄通り」と呼ばれていた。橋に由来する街路名でありながら、「橋」が脱落してしまったわけだ。水上店舗の建設にともない水路が暗渠化して、川のない橋となったことも原因しているのだろう。ちなみに、「サンライズなは通り」と旧新栄橋で交差している「大(太)平通り」——水上店舗の第四街区Aから構成される商店街——も、橋にちなんだ名称である。

「千歳橋通り」ならびに「栄橋通り」もまた、読んで字のごとく、橋名に由来した街路＝商店街である。しかしながら現在は、「千歳橋通り」が「浮島通り」に取って代われ、「栄橋通り」も街路名としてもちいられることはない。

ここで少しばかり周辺に目を配ると、ほかにも橋に由来する地名を拾うことができる。たとえば、「ひめゆり通り」は安里川にかかる「姫百合橋」にちなんで、1950年代には「姫百合橋通り」と呼ばれていた。また、現在では「国際通り」に一括されているものの、安里川の蔡温橋以東は、かつて「蔡温橋通り」と称される商店街であった。

新しいところでは、水上店舗の東側に組織された「むつみ橋通り商店街」を挙げることができる。牧志街道に架かる「ガープ橋」は、1954年の新築工事に合わせて「首都にふさわしい名前」に改称すべく公募され、那覇市歌の一節「むつみしたしむわが那覇市……」にちなんだ応募作「むつみ橋」が選定された<sup>15)</sup>。景観上は「川」も「橋」もない「むつみ橋」交差点であるが、その名はたしかに場所の記憶を刻んでいる。

### (3) ランドマークとしての商業施設

市場も橋も人工的な建造物(施設)であることを考えるならば、わたしたちは戦後那覇における地名の起こりに関して、直截的な祖型をすぐに思い浮かべることができるかもしれない。というのも、那覇の目抜き通りである「国際通り」が、アーニーパイル国際劇場に由来していることは、あまりに有名だからである。ここでは、劇場(映画館)をはじめ、商業施設に由来する地名について、いくつかの例を挙げておきたい。

国際通りに関しては、大濱聡『沖縄・国際通り物語』<sup>16)</sup>に詳しいが、街路名の生成という観点から少しばかり補足しておくことにしたい。昭和戦前期に県道として開発されていた牧志街道は、戦後1950年、「民営バスの発足と共に那覇市の都心部を貫く一大幹線」として、交通の大動脈となり、商業活動に拍車がかかる。

国際劇場が四八年に掘立小屋のような小屋から出発して間もなく平和館、国際劇場が本建築の映画館となり、大宝館が出来、バスの発着所が各所に出来るころの牧志通りは人家、商店が軒を並べる商店街として発展していった。こうした中で続々と高層建築が立ち並び、市の代表的な通りとして面目を一新するころ、牧志通りはいつの間にか国際通りと呼ばれ、文字どおり内外の客が入り乱れる国際的色彩の濃ゆい街路として発展したのは基地沖縄の首都として当然といえよう。(『琉球新報』1955年12月2日夕刊)

この記事では国際性が謳われているものの、地名の起源それ自体は、やはり「国際劇場」に求められなければなるまい。ただし、当時の「国際通り」は、むつみ橋から蔡温橋までの区間を指していた。先述したとおり、蔡温橋から安里までは「蔡温橋通り」と称される、旧市街地で計画的に開発される若松に先行した卸問屋街であった(『琉球新報』1955年12月3日夕刊)。逆に、むつみ橋を境

とする西側（現・県庁側）には、通りの名がついておらず、「俗称松尾通り」、あるいは「旧世界館のあるところは世界館通り、そして現在は国映通りともいつており、またむつみ橋通りという人もいる」など、確たる名称は存在しなかったようなのだ。

蔡温橋通りが卸商店街、国際通りが小売商店街、そしてむつみ橋以西が商店とオフィスの入り混じった街区というように、機能的には空間分化していたものの、「特殊な性格を帯びた大通りとして発展する可能性をおびている」がゆえに、「早く通り会を結成して通り名を決め」ることが求められていた（『琉球新報』1955年12月4日夕刊）。付言すると、世界館より西側も、当時はまだ「名なし」の通りだったのである（『琉球新報』1955年12月5日夕刊）。

アーニーパイル国際劇場の街路名化という先駆的事例は、戦後那覇の都市形成期における街路名の生成にも、おおきく影響を及ぼしたと考えられる。世界館の立地（1950年）にとともない、現・国際通りの一部が「世界館通り」となり、世界館の跡地に国映館が建設されると、必ずしも人口に膾炙したわけではなかったにせよ、一部に「国映館通り」という名称が用いられたことなどは、その証左となるだろう。

同じく、ガープ川右岸に立地した沖映本館（1947年）もまた、1950年代の初頭には「沖映通り」の名を生み出した。このほかにも、旧真和志役所の近傍に立地した「あけぼの劇場」に由来する「あけぼの通り」などの例を挙げることもできる。

商業施設の名称が街路名ないし商店街名として定着した例は、映画館に限られたわけではない。世界館前の国際通りを北へ入り、200mほど進んで右折し、沖映通りに抜ける街路は、1949年5月に開店した「レストラン・ニュー・パラダイス」（『うるま新報』1949年5月2日）に由来する「ニューパラダイス通り」である。同様に、「浮島ホテル」に由来する「浮島通り」も、千歳橋通りに代わって定着した。同ホテルは1948年10月の開業であるから、スムーズに街路名として定着したわけではないにせよ、国際劇場／国際通りやレストラン・ニュー・パラダイス／ニューパラダイス通りと並ぶ初期の事例である。

以上のように、特定の商業施設が街路名として定着していったのは、それらが戦後那覇の都市形成（復興）期におけるランドマークとしての役割を果たしていたからにほかならない。とりわけ映画館は、当時の市街地にあってはひととき目をひく大規模な建築であったし、娯楽の中心として多くの人を集め、そして人びとの心に笑いや潤いをもたらす存在であったはずだ。

## V おわりに

2006年の夏、那覇市内の市場と商店街をひと通り素見した筆者は、ひめゆり通りの神原の交差点から、三原方面へと向かっていた。ふと電柱を見上げると、そこには真新しい看板が設置され、「壺宮通り」という聞き慣れない街路名が表記されている。調べてみると、2005年4月11日に市道壺屋南線の名称として「壺宮通り」が採用され、あわせて通り会の発会式も行なわれていた。

壺宮通りは、ひめゆり通り以東で、ちょうど壺屋と寄宮の境界に位置していることから、それぞれ一字ずつ「壺」と「宮」とを取り合わせて名付けられたのだろう。この通りは、新たに開発された道路というわけではなく、戦後すぐに米軍が作製した地形図にも登場することから、古くから存在している街路である。興味を持たれるのはまさにこの点で、終戦から60年の歳月を経て、「壺宮

通り」と命名されたのだ。

ここで想起されるのが、ドイツ人思想家ヴァルター・ベンヤミンの述べた「街路に名前をつけることには独特の悦びがある」<sup>17)</sup>という言葉である。ふりかえてみると、戦後に都市化した那覇の市街地には、その街区の成り立ちをも喚起させる、じつに個性豊かな名称が街路に付けられていた。たとえば、「天ぷら坂」といった地元の人しか知らないような固有名の存在にふれてみると、都市形成の歴史地理と地名の関係性を問わずにはおれない。

戦後那覇の都市化過程は、大規模な地形改変と（主として宅地への）土地利用の転換、そして独特の施設配置などによって特徴づけられる。しかも上述のように、都市建設の舞台は旧市街地の郊外へと移り、まったく都市的な基盤のないところでスプロールしながら市街地化が進行したのだった。本稿では、この都市化の地理歴史的なコンテクストをふまえつつ、その過程で発生した地名について、いくつかのタイプを抽出して生成の原理を明らかにしてきた。戦後都市形成の初期に登場した地名のなかには、定着することのないまま歴史の後景に退いたり、正式な命名によって消え去ったものも少なくない。

しかしながら、逆に由来となった映画館に代表される商業施設ないし川や橋といった地景が消えてなお、それらが街路名として生きつづけている、つまりその名に歴史を刻んでいる例も多々ある。ここであらためて、ベンヤミンが『パサージュ論』の「P パリの街路」の冒頭に置いた文章を引用しておこう。

パリは活動的な都市、つねに動いている都市として語られてきた。だが、この町において、都市構造が持つ生命力に劣らず重要なのは、街路や広場、あるいは劇場の名前にひそむ抑止しがたい力である。こうした名前はいくら場所が変化しても残り続ける。ルイ・フィリップの時代にはまだブルヴァール・デュ・タンブルに立ち並んでいたあの小劇場が次々と取り壊されてはあらためて他の街区に——市区という言葉を使うのは気が進まない——出現するということが何度あったろうか。数世紀前に街路ができたときの地主の名前が、今日でもまだ街路の名前として残っているケースがなんて多くあることか。「水の城」というもうとっくの昔になくなってしまった噴水の名前が、今日でもパリのあちこちの区に名残を留めている。有名な居酒屋でさえもそれなりのやり方で、市内におけるささやかな不滅性を確保してきた。ロシェ・ド・カンカル、ヴェフル、トロワ・フレール・プロヴァンソーのような文学史上不滅の酒場は言うまでもない。というのもある名前が、たとえばヴェテルとカリシュといった名前が食通のあいだに浸透するやいなや、パリ中が郊外にいたるまで小ヴァテルや小リシュで溢れかえるのである。これが街路の動きであり、名前の動きである。そして、こうした名前はしばしばおたがいにずれながら交差するのである。<sup>18)</sup>

かつて、そこにあった噴水の名前が街路名として残っているということ、それはとりもなおさずシニフィアン（記号表現——街路名やその言葉の響き）とシニフィエ（記号内容——意味内容、通りの光景や人びと、その建造環境など）が乖離したことを意味している。近年、通称であった地名の制度化（認定）や旧称の再認定が進められていることから明らかな通り、地名／街路名が場所アイデンティティの記憶装置として再評価されていることを考えるならば、市街地形成と地名の生成を考察することは、今後の〈まちづくり〉にも資する素材を提供できるだろうし、都市形成の歴史地理を「場所の記憶」という視座から捉え返す、オルタナティブな都市の空間誌も可能となるのではないだろう

うか。

「都市は街路名によって言葉の宇宙となる」(ベンヤミン)<sup>19)</sup>。

## 付記

本稿は公益財団法人国土地理協会第12回学術研究助成を受けた研究成果の一部です(共同研究者:河角龍典・櫻澤誠)。末筆ながら記して謝意を表します。

## 注

- 1) 牧港篤三『幻想の街・那覇』新宿書房、1986年、106頁。
- 2) 上原軟剛編『一九五九年版 見取図付沖縄案内「此の一冊あれば」(大那覇市の巻)』沖縄案内社、1959年、106頁。
- 3) 調査月日を整理すると、8月10日(48頁)、8月20日(1-32頁)、8月30日(33-36、38・39頁)、9月10日(37、40-44、46・47、52-61頁)、9月20日(49-51頁)、10月10日(45頁)、10月30日(62-64頁)となっており、おおむね1958年下半期の状況を示していることになる。
- 4) 加藤政洋『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』フォレスト、2011年。
- 5) 島尾敏雄「安里川廻行」(『透明な時の中で』潮出版社、1988年、220-237頁)、220頁。
- 6) 大宜味朝徳編『沖縄商工名鑑 1956年版』(沖縄興信所、1956年)、125頁。
- 7) 大宜味朝徳編『沖縄商工名鑑 1951年版』(沖縄興信所、1951年)、87-92頁。大宜味朝徳編『沖縄商工名鑑 1953年版』(沖縄興信所、1953年)、46-50頁。
- 8) 開南通りに関しては、次のような指摘がある。「開南交番を境に与儀試験場に出る道路が今では幅員五間の開南通りである。戦後、沖縄刑務所裏の傾斜地と開南校裏、神里原の一部に受入れられた那覇の住民たちは、惨めな天幕小屋から出発してたくましい建設魂をみせ、次々と街づくりをして現在の繁華街となった」(『琉球新報』1955年12月12日夕刊)。
- 9) 1953年の「銀座通り団」は未詳であるものの、1950年6月に、神里原の琉球映画劇場(同年9月に「大洋劇場」に改称)近傍に「銀座マート」が開設されていることから、これにちなむ商店街であったとも考えられる。たとえば、「バー千扇」の新聞広告には「神里原銀座通り」とある(『琉球新報』1952年8月7日)。
- 10) 前掲、加藤政洋『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』、第4章。
- 11) ただし、神里原の大洋劇場付近は「中央通り」とか「中央市場通り」などと呼ばれていたもので、神里原内の中心商店街を指していた可能性もある(『うるま新報』1951年3月5日「よろず」の広告)。
- 12) 1953年の商店街案内「西市場中央通り」には、「道頓堀旅館」がふくまれている。1951年4月に「簡易宿 道頓堀」の開業広告が打たれており(『琉球新報』1951年4月5日など)、「那覇市新市場通り(トーフ市場小前)」とある。略地図から判断すると、公設市場の南側、中央市場通りの近傍に位置していたものと考えられる。
- 13) 「水上店舗」の問題については、加藤政洋「都市水害と建造環境の改変——戦後那覇におけるガープ川「水上店舗」をめぐる——」(吉越昭久編『災害の地理学』文理閣、2014年、118-136頁)を参照。
- 14) 新栄(橋)通りと浮島通りの交差点に立地する丸国マーケットは、1950年4月15日に開業している。当初、新聞広告には「那覇市市場前」ないし「那覇市市場東並木通り」とあった(『うるま新報』1950年4月8日・23日)。現在も、旧丸国マーケットから神里原方面に抜ける街路には「並木」がある。
- 15) 「市民の友」第31号、1954年6月15日(企画部広報課編『広報 市民の友 縮刷版第1集 第1号～第100号(1952年1月～1959年2月)』那覇市、1980年)、68頁。
- 16) 大濱聡『沖縄・国際通り物語り——「奇跡」と呼ばれた一マイル——』ゆい出版、1998年。
- 17) ヴァルター・ベンヤミン(今村仁司・三島憲一ほか訳)『パサージュ論 第3巻』岩波現代文庫、2003年、322頁([P1, 8])。
- 18) ヴァルター・ベンヤミン(今村仁司・三島憲一ほか訳)『パサージュ論 第3巻』岩波現代文庫、2003年、319頁([P1, 1])。

- 19) ヴァルター・ベンヤミン (今村仁司・三島憲一ほか訳) 『パサージュ論 第3巻』岩波現代文庫、2003年、333頁 ([P3, 5])。

(本学文学部教授)